

a

a

2024 11/29

§1 ブラックホールの情報喪失問題

1.1 相対論的な等加速度運動

Minkowski 時空における (相対論的) 等加速度運動を考える。相対論的運動方程式は, Lorentz (直交) 座標系 (ct, \vec{x}) で空間成分と時間成分に分解される (F^j は力) :

$$\begin{aligned} p(t) &= (mc\gamma(t), m\vec{v}(t)\gamma(t)) \\ \frac{dp^j}{dt}(t) &= F^j(t) \quad (j = 1, 2, 3) \\ \frac{dp^0}{dt}(t) \cdot c &= \langle \vec{F}(t), \vec{v}(t) \rangle_{\mathbb{R}^3} \quad (\vec{F} := (F^j)_j) \end{aligned} \quad (1.1.1)$$

($\|\vec{v}(t)\|/c)^2 \sim 0$ と近似した時に Newton 力学における 等加速度運動と等価になる運動は, $\vec{F} = m\vec{a}$ を代入した

$$\frac{d}{dt}(m\vec{v}(t)\gamma(t)) = m\vec{a} \quad (1.1.2)$$

であり, 以下ではこれについて 空間 1 次元の場合を考える。初速度 0 で正方向に運動する ($a > 0$) とする。

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{v}{\sqrt{1 - (v/c)^2}} \right) = a \iff \frac{v}{\sqrt{1 - (v/c)^2}} = at \iff v = \frac{at}{\sqrt{1 + (at/c)^2}} \quad (1.1.3)$$

したがって $t = 0$ のとき $x = x(0)$ であるから,

$$x(t) = x(0) + \int_0^t \frac{at'}{\sqrt{1 + (at'/c)^2}} dt' = x(0) + \left(\left(1 + (at/c)^2 \right)^{\frac{1}{2}} - 1 \right) \frac{c^2}{a} \quad (1.1.4)$$

両辺を二乗すると

$$(a(x(t) - x(0))/c^2 + 1)^2 = 1 + (at/c)^2 \quad (1.1.5)$$

という双曲線の方程式になるので, 媒介変数表示

$$t = \frac{c}{a} \sinh u, \quad x(t) = x(0) + \frac{c^2}{a} (\cosh u - 1) \quad (u > 0) \quad (1.1.6)$$

がわかる。最後に, 固有時を求める。 v に t を代入すると $\frac{v}{c} = \tanh u$ だから

$$d\tau = \sqrt{1 - \frac{v(t)^2}{c^2}} dt = \frac{c}{a} du. \quad (1.1.7)$$

つまり, τ と u は互いに線型なので, 原点を合わせると $\tau = \frac{c}{a}u$ 。ゆえに, 等加速度運動の解は $\tau > 0$ に対して,

$$t = \frac{c}{a} \sinh(a\tau/c), \quad x(t) = x(0) + \frac{c^2}{a} (\cosh(a\tau/c) - 1) \quad (1.1.8)$$

であり, $\tau < 0$ にもこれは拡張可能である。

解として $(t, x(t))$ は適しているのかを確かめる．まず, $\gamma(t) = \cosh u$ なので

$$\frac{d}{dt}(v(t)\gamma(t)) = c \frac{d}{dt}(\sinh u) = c \frac{d}{dt}\left(\frac{a}{c}t\right) = a \quad (1.1.9)$$

なので, Eq. (1.1.2) の左辺は右辺と等しい．次に Eq. (1.1.1) を確かめると,

$$\text{L.H.S.} = \frac{d}{dt}mc^2\gamma(t) = mc^2 \frac{d}{dt}\sqrt{1 + (at/c)^2} = mc^2v(t)a/c^2 = mav(t) = \text{R.H.S.} \quad (1.1.10)$$

等加速度運動では 局所 Lorentz 系はどのように計算 (観測) されるだろうか. $\gamma(v(t)) \equiv \gamma(t) = \cosh u$ なので $\beta(t) = v(t)/c$ とおくと 速度 $\beta(t)$ についての「基底の」Lorentz 変換 は

$$L = (L_\mu^\nu)_{\mu,\nu} = \begin{pmatrix} \cosh u & \sinh u \\ \sinh u & \cosh u \end{pmatrix} \quad (1.1.11)$$

である (成分の Lorentz は L の逆行列). 4 元速度 (次元付き) を U^μ ($\mu = 0, 1$) とすると

$$(U^\mu(t))_\mu = (c\gamma(t), v(t)\gamma(t)) = c(\cosh u, \sinh u). \quad (1.1.12)$$

4 元加速度 a^μ をまず Lorentz 因子によって求めると, Eq. (1.1.1) に従って

$$(a^\mu)_\mu = (\gamma(t) \cdot av(t)/c, \gamma(t) \cdot a) = (a \sinh u, a \cosh u) \quad (1.1.13)$$

であって, これは 4 元速度の 固有時微分とたしかに等しい. :

$$\frac{dU^\mu}{d\tau} = \frac{du}{d\tau} \frac{dU^\mu}{du} = (\mu\text{-th component of}) \frac{a}{c} (\sinh u, \cosh u) = a^\mu. \quad (1.1.14)$$

このように, 固有時刻 τ における局所 Lorentz 系では, 動標構 $\partial'_\mu = L_\mu^\nu \partial_\nu$ を用いて 時間方向 $(\partial'_0)_\tau$ に 4 元速度 U^μ が伸びており, 1 軸方向 $(\partial'_1)_\tau$ に 4 元加速度 a^μ が伸びている格好になる.

1.2 4 元形式で解く等加速度運動

この解を, 今度は 4 元形式で求める. 質量を $m > 0$, 曲線を X^μ , 4 元速度を U^μ , 4 元加速度を a^μ として,

$$m \frac{d^2 X^\mu}{d\tau^2}(\tau) = ma^\mu(\tau), \quad (X^\mu(0)) = (0, \vec{X}(0)), \quad (U^\mu(0)) = (c \equiv 1)(1, \vec{0}), \quad (a^\mu(0)) = (0, \vec{a}). \quad (1.2.1)$$

ここで, 4 元加速度は一定ではない. もし一定とすると, 4 元速度の規格化条件と 加速度・速度の直交条件 から $a^\mu a_\mu = 0$ が導かれるので. 加速度 a^μ がヌルとなり初期条件と矛盾する. 以下 1 次元運動として一般性を失わないので, 1 次元の加速度 $\vec{a} = (a) \in \mathbb{R}_{>0}$ を用いる. 局所慣性系のもとでベクトルの成分を求めるために $\Lambda(\tau) := c^{-1} \begin{pmatrix} U^0(\tau) & -U^1(\tau) \\ -U^1(\tau) & U^0(\tau) \end{pmatrix}$ を用いる. 局所慣性系 (\vec{a} で加速されて動く観測者) のもとで 4 元加速度は

$$c(\Lambda^\mu{}_\nu a^\nu)_\mu^\top = \begin{pmatrix} U^0 & -U^1 \\ -U^1 & U^0 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a^0 \\ a^1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} U^0 a^0 - U^1 a^1 \\ -U^1 a^0 + U^0 a^1 \end{pmatrix}. \quad (1.2.2)$$

のように観測され, 第 1 成分は直交条件より $-U^\mu a_\mu = 0$ と求められる. ここで, $(\eta_{\mu\nu}) = \text{diag}(-1, +1)$ で, これは相対論的に自明な関係である. 一方, 第 2 成分 (空間方向) は 等加速度という要請から

$$-U^1 a^0 + U^0 a^1 = ca \iff U^0 \frac{dU^1}{d\tau} - U^1 \frac{dU^0}{d\tau} = ca. \quad (1.2.3)$$

4 元速度は $-(U^0)^2 + (U^1)^2 = c^2$ のように双曲線を描くので媒介変数 (rapidity) 表示をすることができる. パラメータ $u \in \mathbb{R}$ を用いると, $(U^0, U^1) = c(\cosh u, \sinh u)$, $\left(\frac{dU^0}{d\tau}, \frac{dU^1}{d\tau}\right) = c \frac{du}{d\tau} (\sinh u, \cosh u)$ なので,

$$c^2 \frac{du}{d\tau} = ca \iff u = a\tau/c \quad (1.2.4)$$

というように 初期条件から固有時が求まる. あとは前節と同様で, 曲線 X^μ が求まる. これが “ $(\|\vec{v}(t)\|/c)^2 \sim 0$ と近似した時に Newton 力学における 等加速度運動と等価になる” ことに対する厳密な定式化を与える. このような現象は, 物理的には, ロケットが一定の力で加速されて高速になる状況に対応している. 質量の減少を無視できると仮定したとき, 一定出力で噴射するエンジンで飛ぶロケットでは, 中にいる人 (観測者) は Newton 的に (局所慣性系として) 一定加速度 $\Lambda^\mu{}_\nu a^\nu$ で加速されているように感じる. しかし, 慣性系の観測者からは 4 元加速度は a^μ という成分のもとに観測されるのである.

1.3 Rindler spacetime

§2 外在曲率

§3 埋め込み

3.1 定義

Def. 3.1.1. 定義. 位相空間 (X, T) から位相空間 (Y, S) への埋め込みとは, X から Y の部分空間への同相写像である. つまり, X から Y への埋め込みとは, 写像 $f: X \rightarrow Y$ であって $(f[X], S_{f[X]})$ が (X, T) と同相となるものである.

特に, 以下の性質を満たす.

1. 埋め込みは連続
2. 埋め込みは単射

3.2 例

Ex. 3.2.1. 例. $X = \{1, 2\}$, $Y = \{1, 2, 3\}$ および $T = 2^X = \{\{\}, \{1\}, \{1, 2\}\}$, $S = \{\{\}, \{1\}, \{1, 2\}, \{3, 1\}, Y\}$ とする.

$(f(1), f(2)) = (1, 2)$ で定まる写像 f は (X, T) から (Y, S) への埋め込みである.

一方, $(f(1), f(2)) = (2, 1)$ で定まる異なる写像 f は, $f^{-1}[\{1\}] = \{2\}$ を満たし, 連続写像ではないので埋め込みでもない. ■

Ex. 3.2.2. 例. n 次元 実数 空間 \mathbb{R}^n ($n \in \mathbb{N}$) は $(n+1)$ 次元 実数 空間 \mathbb{R}^{n+1} において, 超平面

$$P = \{(x_j)_{j=1}^{n+1} \mid x_{n+1} = 0 \text{ and } \forall j \in \{1, \dots, n\}, x_j \in \mathbb{R}\}$$

として埋め込まれる. ただし, ここで埋め込みは 包含写像 $\iota: P \rightarrow \mathbb{R}^{n+1}$. ■

Ex. 3.2.3. 例. 直前の例で 次元の組 $(n, n+1)$ を 一般に (m, n) ($m \leq n$) としても同様に埋め込みが成り立つ. ■

3.3 第 1 基本形式と第 2 基本形式

Def. 3.3.1 (第 1 基本形式). Gauss 幾何学における第 1 基本形式は接平面上のベクトルの計量の値と等しい. C^r 級多様体 M 上のベクトル $\partial_\mu := \left(\frac{\partial}{\partial x^\mu} \right)_p \in T_p M$ を使って, 計量 g によって第 1 基本形式が

$$f_{\mu\nu}^{(1)} = g(\partial_\mu, \partial_\nu) : \Leftrightarrow f_{\mu\nu}(p) = g_p((\partial_\mu)_p, (\partial_\nu)_p) \quad (p \in M) \quad (3.3.1)$$

と定義される. または M 上のベクトル場 X, Y に対して一般に,

$$f^{(1)}(X, Y) = g(X, Y). \quad (3.3.2)$$

Ex. 3.3.2. 2 次元 Euclid 空間に埋め込まれた C^1 級曲線 (グラフ)

$$M = \{(x, f(x)) \mid x \subseteq U \in O(\mathbb{R})\} \quad (3.3.3)$$

(ただし $O(\cdot)$ は自然な位相) を例に取る. 点 $p = (x, f(x)) \in M$ における \mathbb{R}^2 上のベクトル $(1, f'(x)) \in T_p \mathbb{R}^2$ は M 上の接ベクトルでもある. つまり, 実数のパラメータ u を \mathbb{R}^2 における x 座標とすると, $\partial_u = \partial_x + f'(x) \partial_y$ が得られる. この時 M 上の誘導計量は $(h_{ij}(p))_{i,j} = (1 + f'(x)^2)$. つまり,

$$h_p(\partial_u, \partial_u) = g_{\iota(p)}(\partial_x + f'(x) \partial_y, \partial_x + f'(x) \partial_y) = g_{\iota(p)}(\partial_x, \partial_x) + f'(x)^2 g_{\iota(p)}(\partial_y, \partial_y) \quad (3.3.4)$$

(ベクトルがどの点にあるかは省略した).

さらに, 弧長パラメータ s をもちいると, $ds = \sqrt{1 + f'(x)^2} dx$ だから, 誘導計量の成分は 1 となり $h = ds \otimes ds$ ■

Ex. 3.3.3. 同じように, 3 次元 Euclid 空間に埋め込まれた (簡単のため C^2 とする) 曲面

$$M = \{(u, v, f(u, v)) \mid (u, v) \in U \subseteq O(\mathbb{R}^2)\} \quad (3.3.5)$$

を考えよう. 曲線と同じようにパラメータ u を設定し, 次元を上げてもうひとつのパラメータ $v (= y)$ を用意した. この時 M 上の誘導計量は,

$$(h_{ij}(p))_{i,j} = \begin{pmatrix} 1 + f_u^2 & f_u f_v \\ f_v f_u & 1 + f_v^2 \end{pmatrix} \quad (3.3.6)$$

であって, これが曲面 M の第 1 基本形式と等しい. ここで, 接ベクトル場は $\partial_u = \partial_x + f_u \partial_z$ (ただし $f_u = \frac{\partial f}{\partial u}(u, v)$), $\partial_v = \partial_y + f_v \partial_z$ (ただし $f_v = \frac{\partial f}{\partial v}(u, v)$) を用いた. 添字 $i = 1$ が u 座標, また $i = 2$ が v 座標を表している. この第 1 基本形式は固有値・固有ベクトルとして

$$(\lambda, v) = (1, (-f_v, f_u)^\top), (\lambda, v) = (1 + f_u^2 + f_v^2, (f_u, f_v)^\top) \quad (3.3.7)$$

をもっている. ■

Def. 3.3.4 (第 2 基本形式). Gauss 幾何学における第 2 基本形式は, 曲面上の点と接平面の距離に関する主要項で, M が N に埋め込まれた超曲面とし,

- X, Y を N 上のベクトル場,
- n を超曲面の単位法線ベクトル

とすると,

$$f^{(2)}(X, Y) := g(\nabla_X Y, n) n \quad (3.3.8)$$

で定義される.*1 ただし, $\nabla_X Y$ は X 方向の Y の共変微分で, N の局所座標系 $(x^\mu)_\mu$ と Christoffel 記号 $\Gamma_{\mu\nu}^\lambda$ によって以下で定義される:

$$(\nabla_X Y)_p = \left(\frac{\partial Y^\lambda}{\partial x^\mu}(p) + \Gamma_{\mu\nu}^\lambda(p) Y^\nu(p) \right) X^\mu(p) \left(\frac{\partial}{\partial x^\lambda} \right)_p. \quad (3.3.9)$$

Ex. 3.3.5. 再び曲線を考える. ここでは f は 2 階微分可能とする. 曲線 M 上の接ベクトル場 $X = \partial_u = \partial_x + f'(x) \partial_y$ について, 第 2 基本形式 $f_{uu}^{(2)} = f^{(2)}(\partial_u, \partial_u)$ を求めたい. まず, グラフ上の法線ベクトルは接ベクトルを 90° 回転させ, $n = (-f'(x), +1) / \ell(x)$, $\ell(x) = \sqrt{1 + f'(x)^2}$ ととる. 接ベクトルと法ベクトルは左手系をつくる. 次に, 接ベクトルを曲線上に沿って微分 (共変微分) すると

$$\nabla_{\partial_u} \partial_u|_{(u, f(u))} = \frac{\partial f'}{\partial x}(x) \cdot 1 \cdot \left(\frac{\partial}{\partial y} \right)_{(x, f(x))} = \frac{\partial^2 f}{\partial x^2}(x) \left(\frac{\partial}{\partial y} \right)_{(x, f(x))} \quad (3.3.10)$$

と共変微分が表せる (ただし, $(u, f(u))$ は M が \mathbb{R}^2 に埋め込まれたときの点の位置). よって,

$$f_{uu}^{(2)} = \langle \nabla_{\partial_u} \partial_u, n \rangle_{\mathbb{R}^2} n = \frac{\partial^2 f}{\partial x^2}(x) \frac{1}{\ell(x)} \cdot n \quad (3.3.11)$$

となり, 曲面上の量に関しては $f_{uu}^{(2)} \cdot n = \frac{f''(u)}{\sqrt{1 + f'(u)^2}}$. ■

Ex. 3.3.6. 同様に曲面についても考える. $\partial_u = \partial_x + \frac{\partial f}{\partial x} \partial_z$ および $\partial_v = \partial_y + \frac{\partial f}{\partial y} \partial_z$ だから

$$\nabla_{\partial_u} \partial_u|_{(u, v, f(u, v))} = \frac{\partial^2 f}{\partial x^2}(x, y) \frac{\partial}{\partial z} \Big|_{(x, y, f(x, y))}, \quad \nabla_{\partial_v} \partial_v|_{(u, v, f(u, v))} = \frac{\partial^2 f}{\partial y^2}(x, y) \frac{\partial}{\partial z} \Big|_{(x, y, f(x, y))}. \quad (3.3.12)$$

*1 Gauss の曲面論では単に係数部分を行列にして第 2 基本形式と呼ぶ.

加えて,

$$\nabla_{\partial_u} \partial_v|_{(u,v,f(u,v))} = \frac{\partial}{\partial x} \frac{\partial f}{\partial y}(x,y) \frac{\partial}{\partial z} \Big|_{(x,y,f(x,y))}, \quad \nabla_{\partial_u} \partial_v|_{(u,v,f(u,v))} = \frac{\partial}{\partial y} \frac{\partial f}{\partial x}(x,y) \frac{\partial}{\partial z} \Big|_{(x,y,f(x,y))}. \quad (3.3.13)$$

今, \mathbb{R}^3 の外積を用いると法ベクトル場が

$$\partial_u \times \partial_v = -\frac{\partial f}{\partial x} \partial_x - \frac{\partial f}{\partial y} \partial_y + \partial_z \quad (3.3.14)$$

だから, 長さ $\ell(u,v) = \sqrt{1 + \left[\frac{\partial f}{\partial u}(u,v)\right]^2 + \left[\frac{\partial f}{\partial v}(u,v)\right]^2}$ によって第 2 基本形式が

$$\begin{pmatrix} f_{uu}^{(2)} & f_{uv}^{(2)} \\ f_{vu}^{(2)} & f_{vv}^{(2)} \end{pmatrix} = \frac{1}{\ell(u,v)} \begin{pmatrix} \frac{\partial^2 f}{\partial u^2} & \frac{\partial^2 f}{\partial u \partial v} \\ \frac{\partial^2 f}{\partial v \partial u} & \frac{\partial^2 f}{\partial v^2} \end{pmatrix} \quad (3.3.15)$$

と求まる. ■